

佛の誓願に生きる

——光を放つ現代の宗教家——
黒田武志住職
のインタビュ——

高度情報化、国際化、高齢化の大きな波が押し寄せて来ようとも、押し流されるどころか、敢然として立ち向かい、見事な船をつくり、最新技術を駆使して海にのり出す安全操舵の船長・黒田武志師。無一文から始まりわずか二十年足らずで檀家二五〇〇世帯を擁するまでになつた横浜善光寺にはいつも新しいダイナミック

なドラマが展開している。大誓願を立て、住職はその成就をひたすらみ仏に祈り、また檀家を愛する。檀家は住職を信頼し運命を共にしようとする。いつも釈尊の教えの中から秘策を見出し、光を放つ現代の宗教家・黒田武志師を今回はずねてみよう。

《人と思想》

「ちよつとでも邪心があつたら絶対だめだ。」

純粹に、純粹に。私心をなくせ。仏教者のやることは法を説くこと」と、仏の生命そのものを生きようとする黒田師の言葉には何のかざりも

なく、ただその生きざまが声となってあふれてくるばかりだ。

師は徹頭徹尾、仏の誓願に生きようと必死だ。泣きながらやっているという。やせ我慢しながらやっているという。

「人生は誓願だ」と語る師は、これまで二度の大誓願を立てた。その一つは、アメリカに開教師としてつとめていたころ、「日本に帰ったら新寺を建立しよう」ということだった。それは釈尊の説かれた何ものにも片寄らない中道の教え、すべては因縁によって生起するという縁起の教えをもって人々の心を救う正しい教えを高く揚し、世界平和と人類福祉に貢献すべく、多くの人々の心の憩いの場所をつくるために——というものだ。

そもそもタイ国ワットパクナムでの修行から帰ってきた時（一九六六年）、排他的な教条主義と、葬式や法事という人間の死のみに関わる形

骸化した空虚な日本の仏教界の姿に接し、「宗祖を通して釈尊の本源に帰らなければならぬ。

宗派を超えた全一的な仏教、実存者の教化救済こそ重要だ」ということを痛感したという。そのためにはまず広い視野に立つべきと、渡米したのである。

師は八人兄弟の六男として栃木県にある光真寺という曹洞宗の寺に生まれ、傑僧と言われた父・白純住職のもとで法務を叩き込まれた。生活は苦しかったが学問だけはと、駒沢大学の大学院で仏教学の修士課程を終えた。そのまま総持寺（神奈川県）、つづいて永平寺（福井県）へと上山し、修行を積んだのである。しかしどこか心の奥で仏教への疑問、教団や寺院への疑問が湧き起こり、自らの僧侶としての存在意義を問わざるを得なかった。やがて永平寺から下山すると、そのまま全国行脚へ出かけたのである。托鉢の道すがらお経を唱えていると、思いのほ

か喜捨を受け、その時「ああ、私は生かされて
いるんだ」ということを感動的に確信したとい
う。以後、それが師の人生の基礎になった。

師の歩みはひたすら法のために、身を削って、
大誓願に徹して徹して生きる道だ。「精進しなき
やだめだ」という。「人の三倍努力して一歩前進
だ」という。しかし師はただがむしやらにやつ
てきたわけではない。法に生きる熱心には仏の
智恵が与えられた。師は誓願の具現のためにあ
らゆることを考え、実践した。そしてそれは一
つつ実っていった。

人の心を大切にし尊んだ。「自分にできないこ
とは、力のある他の人の手助けをいただくこと
により事は成せるのです」とあらゆる人の智恵
と力を動員した。師のまわりには、日本の仏教
界を代表するような人々が協力を惜しまない。
しかも「利害、打算で考えたら絶対だめだ」と
師が言うごとく、それらの人々とは人間と人間

の不思議な出会いによって結ばれているのだ。

あくまでも師は『学道の人は貧なるべし』を
強調する。「微塵たりとも地位や名譽を欲しがる
ような邪心をおこしてはならない」と言うのだ。

タイ国のワットパクナムに学んだ師は戒律の
重要さ、行の重要さを訴える。「日本の仏教はと
もすれば南方上座部仏教（小乗仏教）を見下げ
る傾向があるが、タイの人々は二百二十七の戒
律を守っており、学ぶべきものが多くある。お
よそ戒律のない宗教があらうか」と師は言う。

「他宗や新興宗教のことをとやかく言う人が
いるが、問題は救われているかどうかだ。僧侶
が人を救うことができなければ意味がない」と
強調する。

師は「宗祖を通して釈尊に還る」ということ
を自らの宗教生活の基盤としている。宗祖であ
る道元、瑩山両禅師も釈尊につながる仏教を純
粋に説いたのであって宗派をつくろうとしたの

ではないという。

師はその意味を込めて釈迦殿を建立した。「宗祖を通して釈尊に還る」。この言葉は本当のものを見つめて、本当のものを創り上げていくという信念の原点だという。

師は言う。「生かされている命を、一滴残らず仏法のために、人のために、使い切ってから一生を閉じよう！現世での仕事をし尽したあとの未来は、仏にまかせて安心して歩いていこう！」

《布教の力》

師は二十年前（一九六九年）にゼロから新寺を建立し、現在では檀家数三千世帯になんなんとしている。この脅威的発展はすでに各種マスキミのとり上げるところとなったが、この短期間の成長にはそれなりの理由があった。

それは死者を葬ることと、その後の供養を寺院経営の主たる柱とし、現に生きている人々の

心に生命を与える宗教本来の使命を忘れた日本の仏教や寺院のあり方に疑問を感じ、では本来の役割を発揮するためにはどうしたらよいかを真剣に求めたのである。

そこでまず、周囲の人々の心を捉えることが先決と、子供に向けた日曜学校を開き、ボーイスカウト運動の育成に力を注ぎ、また少林寺拳法の少年達に坐禅指導をしたり、瑩山禅師の教えのとおり檀家を敬うことと仏のごとく相對した。その努力の積み重ねと、多くの人々の協力の結果が今日の善光寺にほかならないというわけだ。

師はまた立地条件のよさを上げているが、墓碑二万基を擁する壮大な横浜市営日野公園墓地の門前にあること、墓地所有者の三十割は所属する寺院を持つていないこと、横浜は国際都市であることなどの立地条件を生かしたのは、師の理想と決意だ。すなわち、修行の場として、

布教の拠点として、さらには檀信徒の研修センターとして、仏教の国際的使命を果たす拠点として理想的な寺院を創ろうとしたその夢の正しさと決意の強さであった。師は信念をもって誠意の限りを尽し、つとめた。すると周辺の多くの人々は有形、無形の協力をさし向けるようになった。檀家との交流が密接になると、地域の人々から口コミでどんどん拡がっていった。

檀信徒の有形、無形の協力は、仏法のために用いて檀信徒に還元するのは当然の理であるとして、お葬式や法事など必ずその意味を説き、法話を行い檀信徒の気持を安心に導き、あるいは奮い起こした。

週間の行事、年間の行事はぎっしりとつまっている。それらの行事においても必ず法話を行い、バザー、あるいは芸能人を呼んでの清興を催すこともする。これは寺に親しんでもらい、寺と檀信徒および檀信徒相互の心のふれあいを

深めるための手段だ。寺は決して人間の死のみに関わるだけの場所ではないこと、喜怒哀楽すべての心のその折り折りに関わる開かれた場所であることを認識させた。

「学ぶのが檀徒なら、指導するのも檀徒」というわけで、これだけ多数の檀徒がいればあらゆる分部の専門家が揃った。有能な檀信徒たちが強力なブレーンを構成するのである。

《事業と幻》

アメリカから帰ってきた時（一九六九年）、師は全くの無一文であった。全ては借金から始まった。

善光寺の前身は、林堅峰師が、黒田師の父・白純師の勧めもあって建てた長光寺という小庵であった。ところが林師が前年の一九六八年この世を去り、小庵は他人の手に渡っていたもので、それを黒田師が直談判をもって六百万円で

譲り受けたのである。およそ二百坪、もちろん借金によってである。以来、着々と改築、増築、新築、拡張を重ね、一九八〇年には檀家数千六百を超え、翌八十一年には念願の釈迦殿建立に着工、八十二年十月総工費三億七千万円をもって竣工する。

一九八四年、檀家数も二千世帯を超えた善光寺は、開創十五周年を期して、第二の大誓願「海

外留学僧派遣育英会」を発足させた。

これは、人づくりこそ、全ての恩徳に報いることだと、師が最大の情熱を傾けるものだ。これまで歩みと寺の成長も仏天の加護と人々の力によってなされたもの。これに報いる道は「人づくり」しかない。しかしこうした事業は一ヶ寺でなせるものではない。師はこの難行を実行するにあたり、檀家の人々に、ご飯を一食毎



に一口だけ減らして下さい。それで仏法をひろめたい……と訴えた。法輪転ずるところ、食輪自ら転ぜられる」とは師の確信だ。それだけに生命がけて仏法を説く。援助して下さいる檀家は仏のごとしと、瑩山禅師の教えをひたすら実践した。

すでに派遣留学僧は九ヶ国二十二名となつてゐる。平成元年度もすでに五人が決定した。留学僧たちはみな誓願を背負つて立つ、厳選された真面目で優秀な学僧ばかりだ。宗派も国籍も男女も問わない。

師は、自分が六十歳になるまでに百人ぐらいは送れるであろう。そのうち一人でもいい世界に通ずる人が出るならば、と願う。かつて百人に十人ぐらいは、と言つたら高田好胤師が、それは欲張りだよ、お釈迦様でも五百人中十人もいなかったのだから、と言われたそうだ。

師の決意の程を紹介しよう。

——不安と絶望の危機に瀕した現代の社会ほど、釈尊の教法宣布を必要とするときはありません。

日本は、世界最大の仏教国でありながら、仏教界は、遺憾ながら直接収入につながる仏事を司ることが寺院の大きな目的であるというふう
に受けとめているのが現実で、世界の大事に即
応して教化の実をあげる態勢に欠けておりま
す。宗派仏教に枝分かれた現在の日本では、
信仰の対象や教義がそれぞれ異なるために、各
宗派が一丸となつて事に対処するにはどれだけ
待つか。滅びの道を突き進むその速度を少し
でもゆるやかにするために一人でも多くの人が
力をあわせて、いしづえを築きたい。私は、新
寺を建立した初心に立ち還つて、本当に人を育
てるための海外留学僧派遣というこの大誓願を
成就しようと発願いたしました。

(宗教新聞第一三七号から転載)